

佐賀新聞 2014(平成26)年10月17日(金)

②美人画広告の幕開け



「紫調」を着物陳列会の広告に使った三越のポスター(明治42年)

明治40年、東京勸業博覧会が上野公園で開催された。680万人もの来場者でにぎわった。園内では美術展も開催された。出品作品は美術及び工芸全般にわたり、洋画部門で一等賞を受賞したのが岡田の『婦人像』(ブリヂストン美術館蔵)だった。発表当時は、『紫

『婦人像』三越のポスターに

調』、あるいは著名人にゆかりがある者ということを暗にほめかして『某夫人の肖像』と呼ばれた。

この作品を岡田は、前年の春から描き始めてほぼ1年を費やし、博覧会が開会する1カ月前に完成させた。実は制作期間中の慶事として、岡田は大みそかに新進の小説家小山内八千代と結婚していた。八千代は近代演劇の開拓者、小山内薫の妹で、洋行帰りの画壇の若きリーダーは、八千代にとって憧れの人であ

ったよつだ。

「美人画の岡田」の名声を確立した『紫調』は、八千代との婚姻の祝賀と見まがう華やかさに満ちていた。元禄風の衣裳に髪を「立兵庫」に結び、波に千鳥模様のかんざしを挿している。右肩に小鼓をのせ、鼓を打った右手が鼓面を離れた瞬間があらわされ、そこに乾いた低い音の響きが生じる。鼓の音色を調整する調べ緒は白と紫色で染められ、作品の題名はこの紫色の調べ糸に由来していた。

モデルとなったのは、三越呉服店(後の三越百貨)の経営改革を行った高橋義雄(箒庵)の妻千代子である。

箒庵は数寄者として知られていたが、千代子も歌舞音曲の世界に通じていた。明治42年の暮れ、39歳で早世したため、『紫調』に描かれたのは、そのわずか2年前のことだった。そして、亡くなる年の5月に、三越は『某夫人』を着物陳列会の広告ポスターに使用する。まさに美人画ポスターの幕開けを印象づける箒庵の決断だった。

(佐賀県立美術館副館長・公本成一)

岡田 三郎助 — エレガンス・オブ・ニッポン 11月16日まで県立美術館で